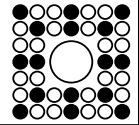


Newsletter of the British Council Japan Association

# BCJA Newsletter

No.6

September 30, 1996



## 洋上の想い出

越智武臣

すでに古希のよわいを越えてみると、自分の半生、こし方を振りかえる日が多い。これという目立ったこともなかった学究生活、しかし、この間にも忘れがたい土地が三つばかりある。私の半生は言ってみれば、この三点を結ぶトライアングルの中であつたかと、今にして思う。

その第一は、瀬戸内海に四国側から三角形に突き出た高縄半島の先端と前方の多島海。愛媛県越智郡。これが私の故郷である。私はここで10代半ば、旧制中学を出るまでの日を送った。次いで京都、ここでは旧制高校、長かった大学生活を含めると、はや半世紀以上が経つ。そして最後、これは僅かに一年に過ぎなかったが、北イングランド、かつてイースト・ライディングと呼ばれたヨークシア東端の一角。北海と広大なハンバーの河口とウーズ、ダーウエントの水系に囲まれたイチヨウの葉のような小さな土地。昔はイマハルとも言ったが、故郷に今治の港があるように、ここにはハルの港がある。

遠い祖先の血がどうか知らないが、私はよほど海に運命づけられて生まれてきたように思う。私の留学年度を見れば分かることだが、英国へは行きも帰りも船であった。瀬戸内海は何十回となく往復した。これがいつしか私の歴史観を決定するようになった。もっとも、のちの渡英には空路を利用したが、いや、せざるをえなかったが、眼下に広がるユーラシアの陸塊を、私は陸の海と見た。

もうかれこれ40年まえになるが、私を英国に駆り立てたのは、この国の地方史をやるためであった。地方に暮らしてみなければ、一国の歴史など分かるはずはない。これが地方人である私の気負いであった。だからブリティッシュ・カウンシルが、私の意を汲み、初めはどんな所が見当さえつかなかったが、ある英人が「ノルマン征服以来、もっとも変わっていない土地」と言ったこのヨークシアの片隅に私を置いてくれたことに、私は今どれだけ感謝しているかわからない。

さて、永年歴史学をやり、京都は無論、全国、十指に余る国立大学を講義して回ってみて、ひとつだけ不思議に思うことがある。それは、おたがいこの小っぱけな島国に生息しながら、この国の歴史家が、ついぞ「海」というものを、その意識にのぼらせないことである。勿論、偉大な例外があつたことを知らぬではない。しかし、大方がそうなのだ。根堀り葉堀り、小さな陸上のはやる。だが、それで万事終りとするのだ。あるいはこれは、私が京都というかつての王城の地、この閉ざされた盆地の人と接してきた加減かとも考えてみる。しかし、どうもそうでもないらしい。京都とて昔は

立派に港だったのである。かの紀貫之が、遠い土佐での任を終えて、都へ入るべく下船したところがどこであつたか思い返してみるがよい。淀川水系を考えると、山崎もひとつの港、後世の伏見に至っては言うまでもない。問題は思索の先が淀の河口で留まり、想像力がその彼方に及ばぬことである。

いうまでもなく淀川の水は大阪沖に果てるが、その水はまた瀬戸内の水に混ざり、瀬戸内の海はまた大洋を越え、古人も云つたようにテムズの岸を洗うのだ。今日のように一日で英国まで飛ぶ時代になれば、結構なことだが、その中間の陸や海にどんなことがあり、かつてあつたかは分からずじまいに終わる。そしてこの国にいるのと同じく、向こうでも根堀り葉堀り、こまかなことをやって、ハイ、これが論文でござると提出する。私には一向に面白くない。

さてユーラシア大陸の向こう側、ほぼ対照的に、英国というよく似た島がある。しかし、この人は、真底自分らが、島の民であることを心に刻んだ人々であつたように思う。かつて私の同僚で「あなたは島だから」と言った御仁がいた。はて、700はあるという瀬戸内の島の中で、この人は私をどの島だと思っているのかと、一瞬思ったが、よく聞けば、私が四国の産であるということらしかつた。四国が島でも本州は島ではないと思っている。丹波の人であつた。毎朝テレビでは日本列島というが、果して列島だと思ふ人がどれだけいるのだろうか。後日私は、英国の大航海時代史を編む機会に恵まれたが、あの膨大なハクルートの遺産を繕きながら、彼ら英人達が辿つた長い長いアジアへの航路を私もまた一留学生として辿つたことに、限らない感動を覚えた。本当に二度とあり得ない経験をさせて貰つた。そして驚くなかれ、あの無敵艦隊の年、すなわち1588年、かの提督ドレイクやホーキンスの出撃拠点となつたプリマスの港に、二人の日本青年の姿を発見しようとは。英人ウィリアム・アダムズ三浦按針の日本渡航を遡ること、実に12年前の話である。私は鬼の首でも取つた気で、あちこちでこれを講義し続けた。しかし帰ってくるこだまはなかつた！

しかし、一面海はこわいものである。私の留学時は戦後まだ日なお浅い。焼けただれた貧相な日本の岸壁に、英国の西洋客船など着いてくれる時代ではなかつた。神戸と香港の間は、行きはオランダの、帰りは中国のチャーター船が中をとりもつてくれた。それがまた行く時は、京都の五山に送り火の灯る8月の半ば、台風シーズンとあつて、途中奄美大島の近くで狂烈な時化に遭い、まる一日名瀬の港に避難した。いま日記を読み直してみると、香港までたっぷり7日はかかっている。また帰りは帰りで、潮岬の近くでもう一つこわい台

風に遭い、横浜行きが急に変更になって四日市に逃げ込んだ。台風一過、故国の空に明月が美しかった。のちに狩野川台風と名付けられたこの台風の爪跡を、後年伊豆の旅すがら発見した。葎山の近くだったか、土蔵の白壁に、しかも軒近く一本の汚線が走っていた。桑原々々、よくぞ一命をとりとめたと思う。しかしこれがまたこの日本という絶海の孤島の過去を考える上での好個の体験となった。われわれの氏族もおそらくそうだろうが、北から南から、外洋から流れ着かないでどうしてこの島国民族の形成がありえたらうか。この歴史観の初歩を、私はあの北海と大河に臨むヨークシアの一隅で考え続けた。

明月といえば、これも思い出すが、往路それを仰いだのは、コロンボを出離れた印度洋上。香港から乗船した同室の林君が、月餅を切って上甲板に私を招じてくれた。そして一詩を書いていわく。これ、われわれの風習だ、と。

牀前看月光 疑是池上霜  
拳頭望山月 低頭思故郷

われわれの年代であれば、これくらいは分かる。李白である。私も王維の詩をもってこれに応えた。

下馬飲君酒 問君何所之  
君言不得意 歸臥南山俸  
但去莫復問 白雲無尽時

君に比べれば、中をとりつなく私の英語がへたくそであったことはいうまでもない。今君はどうしているであろうか。それにしても同字同文の国はありがたい。君はまた出立に当り師が送られたという一詩も見せてくれた。「載筆」という言葉があると、かつて阿波藩の儒家の家系であったという、さる東洋史の先生から聞いたことがあった。当時わが国では早急に失いつつあった文人の伝統が、君においてまだ息づいていたことを見た。

余白もないが、大学についても一言。私が行くことになったハル大学は、ユニヴァーシティ・コレッジから昇格して間もなく、ブリテイッシュ・カウンシルの支局もできて早々で私の名はたしか名簿の初めの方にあるはずだ。大学のチューターは故レイフ・デイヴィス博士、のちのレスター大学副学長、まだ少壮の学者で後日英国17-18世紀研究に、あの「商業革命」の名を不動にした力作を次々と発表されつつあり、主任はA.G. ディケンズ教授、のちのロンドン大学歴史学研究所長。名著『宗教改革史』その他の著作の基礎を積み上げられていたころであったかと思う。レスター大学も私が在留期間に昇格したが、思えばこの時から20年後、二度目の渡英のチャンスに、私をレスターに受け入れてくれたのはデイヴィス教授であった。しかし、そんなことを誰が予想したであろうか。レスターに着いた翌日師の訃報に逢おうとは。私は西部の港々の歴訪にその悲しさを紛らわした。「勉強するより感じてこい」とある先学は出発に当たって言ったが、実際感じただけであったかも知れぬ。しかし、今それが私の土台となっている。

(OCHI Takeomi, 京都大学名誉教授, University of Hull, 1957/58)

### 著書紹介

「われわれにとって革命とは何か」ある分子生物学者の回想 芝谷篤弘 (BCS 1955/56) 著  
朝日選書 1996

## 英国人の法律感覚 --- 国際法研究者の印象 ---

三好正弘

国際法の研究をしていると、英国の法律家の特徴かと思われる点に気付くことがある。そのような一、二の点を取り上げて、彼らの基盤を成す一般国民の法律感覚との関連に触れてみたい。

国際裁判では、伝統的に、中立の立場の裁判官に混じって当事国の選定した裁判官が裁判官席に着くのが普通である。これは英国人のプライドであるフェア・プレーの精神に反することであるが、英国もこれを良しとしている。自国の裁判官が裁判に当たることは奇妙に見えるが、歴史を通じて、一般に国家にはこのように国際裁判の場で少しでもコントロールを効かせようとする傾向のあることが明らかになっている。ただ、英国の法律家は割に「何人も自ら関係する事件の裁定者たるをえず(nemo iudex in causa sua)」の原則にこだわりを見せ、その延長で、国際紛争の処理においても第三者による処理手続を選ぶ際にはなるべく客観性・中立性の高い手続を指向する傾向があり、仲介 (mediation) よりも調停 (conciliation) を、調停よりも裁判を選び、裁判の中でも自国選定の裁判官を加える仲裁裁判よりも一定数の常任の裁判官から成る国際司法裁判所での裁判を選考しようとする傾向がある。

ここでそれを示すと思われるエピソードを二つ紹介してみたい。1905年のドッガー・バンク事件と1962年のレッド・クルセーダー号事件という二つの国際審査 (inquiry) の際に見られた英国の態度である。前者は日露戦争のとき、ロシアのバルチック艦隊が極東に向かう(後の日本海海戦で日本海軍に破れる) べくバルト海から北海に出たところで、1904年10月のある夜の夜のこと、数隻の英国トロール漁船を日本の魚雷艇と誤認して発砲し、数名の死傷者を出し甚大な物損を与えたという事件の国際審査委員会による処理である。フランスの斡旋で英露間の紛争が、「名誉又八重要ナル利益ニ関係セス、単ニ事実上ノ見解ノ異ナルヨリ生シタル国際紛争ニ関シ、・・・事実問題ヲ明ニシ、右紛争ノ解決ヲ容易ニスル」(1899年国際紛争平和的処理条約) ための制度として設けられた審査委員会に付託されたが、英国は被害国でもありまた日本と日英同盟の関係にあることから、強くロシアの責任を追究しようとの姿勢で臨んだようで、当初は裁判で争おうとした。結果は審査委員会という、責任の所在を明らかにする裁判所ではなく事実関係の解明を旨とする機関による処理になったが、それでも委員会の任務としてロシアの責任とその程度を明らかにすることが審査条約の中に謳われたのは、英国の強い態度が盛り込まれたせいかと思われる。

もう一つのレッド・クルセーダー号事件は、1961年5月スコットランドのトロール漁船レッド・クルセーダー号がデンマーク領フェロー諸島沖での違法操業を問われてデンマークのフリゲート艦に拿捕され、裁判所で所定の手続を受けるためその先導で港に向かう途中、くるりと方向転換して逃げ始め、発砲されて被害を蒙ったという事件である。この事件の処理に際してのデンマーク側の素早い動きに対して英国側の反応はやや遅いとの感じはあるものの、両国の合意の上で設置された審査委員会は三名の委員全員が第三国から選定され、当事国の委員を含まず、また、その三名のうち二名が国際法専門家という委員会が恰も裁判所の如き審理を行なったという事実は、客観性の高い審査を志向した結果かと思われ、これはデンマークの意図でもあったろうが、同時に英国の "nemo iudex" の原則へのこだわりが働いたのではないかと私は想像している。

ここで、話はいきなり20余年前の英国滞在中の身近の経験になるが、我家の子供達と近所のあるいは学校の友達とが一

緒に遊んでいるのを見ていると、ときたま "Unfair!" という合唱を聞くことがあった。だれかが「ずるい」ことをすると、それ以外の子供達からそのような一斉の反応が出るのであった。当時私は、こうやって英国の子供達はフェア・プレーの精神を学んでいくんだな、と一種の感慨を覚えたことを記憶している。また、"Keep Old Coulsdon Tidy" という標語を近所の道端で見かけたが、なるほど私の一家が住んだOld Coulsdon(ロンドンの南郊で Surrey 州)の村の道路にはちり一つ落ちていなかった気がする。これは一定の明示的標語によってある規範を示したもののだが、英国ではこのような明示的な規範よりも、社会が長年かけて暗黙のうちに設定し、その構成員があうんの呼吸できちんと守っている規範が非常に多いという印象を受けた。事実、このことを確かにそうだと記述した文献に出会い、納得したことがある。その著者によれば、「英国人はだれでも、ほとんどあらゆることについて自らの権利を知っている。最も複雑な法の下でさえ、自らの立場がどうなるのかについての英国人の知識には驚くべきものがある。新しい状況に置かれて何も分からず途方に暮れたとき、最初にとる行動は規則を学ぶことである。学校であれ、会社であれ、労働組合であれ、クラブであれ、委員会であれ、下院議会であれ、初めてそこに入ったとき、直ちに出てくる反応は、己をひけらかしたり、強い印象を与えようとしたり、己の個性のユニークさを見せようとしたりするのではなく、規則を研究し、学び、しかる後にそれを厳格に守るという態度であろう。」という(Anthony Glyn, *The Blood of a Britishman*, London, Hutchinson, 1970, pp173-174)。

英国議会での議員達の議論の展開、そのやりとりは見事である。しかも、それがほとんど手続き規則を巡って展開され、それがほとんどメモなしでの応酬であるという話を聞いていたが、確かにその通りであることを私は自ら確認したことがある。1975年6月のある日、英国が1973年1月に EC に加盟したことの是非を国民投票にかけるとの議題を巡る下院での討論を傍聴する機会があり、昼食抜きで午後3時ころまで二階の傍聴席から階下で展開される議員達の弁舌を注視し謹聴したが、少なからず興奮し感激したことを思い出す。その議事録の草案が早くも翌日には政府刊行物センターから刊行され、その一両日後には郵送されてきて、事ゆっくりしていると思っていた英国人の議会運営に見せるプライドを改めて認識した。(序でながら、議員達の議会での討論、テレビに映しだされる政府要人などの記者会見の席での見解表明など、いずれもメモなしで行なわれるのがむしろ通例というべく、かつて第一回東京サミットの際の最後の各首脳の記者会見でも、ひとり英国のサッチャー首相だけがメモなしで会見に臨んでいた。)

このような慎重さと周到さの点で、法律家はどうかであろうか。彼らは古くからのあの歴大な判例を読みくだけ、然るべき法理を抽出する訓練を受け、それを日頃実務や研究において実践しているのであるから、帰納的論理には極めて強いといわざるをえない。いや、慎重さ、周到さなくして判例を読み解くことは不可能というべきで、事案毎に異なる法理の中から共通点を見出し、その微妙な差異を見落とすことなく把握し、更に、時代によって変化する判例の動きをしかとキャッチするのは至難の技というべきかもしれない。彼らはそれをやっているのである。とかく法律家は世間のひとから煙たがられる存在(「良き法律家は悪しき隣人なり」)であるが、それだけ物事にうるさく目を凝らす人種であるということであり、このことについては英国も例外ではないと思う。

英国では一般の人々が例えば我々日本人より言動に慎重で周到であるとの印象を持っているが、その上に立つ法律家はそれに輪をかけてそのような資質を備えていると思われる。ここでも一つエピソードを紹介してみよう。国際条約の解釈を

巡る話である。

1969年に国連のイニシアティブの下に「条約法に関するウィーン条約」という、条約の締結と運用上の各種の問題に関する規定を設けた多数国間条約が作られた。その中に解釈に関する一般規則が盛り込まれており、「条約は、文脈によりかつその趣旨および目的に照らして与えられる用語の通常の意味に従い、誠実に解釈するものとする。」とされている。この条約の草案作りの段階では、1950年代から相次いで四人の英国の国際法専門家が中心的役割を果たし、全体の軌道作りをしたといえる。一般に条約の解釈については、当事国の意図を読み取ることが重要であるとされ、そのために条約交渉過程の作業を重視する立場があり、大陸法の諸国の法律家の多くはこれを主張し、英国と同じ判例法の伝統を持つ米国の法律家も、これと条約の目的を重視すべきものとする傾向が強いが、英国の法律家は、国内の制定法の解釈についてと同様に、何よりも文言を重視する立場をとる。その理由は、最終的に出来上がった文言にこそ当事国の意図が一番良く表われている筈であるというにある。

そしてもう一点、英国の法律家が強調するのは、国際司法裁判所が(その前身である常設国際司法裁判所も)条約の解釈については文言を最重要視してきたという点である。その際に、前に触れた仲裁裁判よりも国際司法裁判所を選択するという姿勢がここにも窺えるのである。もっとも、この場合は、判例の集積には常設機関たる後者の方が一貫性を期待することができ、すぐれているというのが主たる理由であろう。これと対蹠的なのは、ポーランドの一地域出身でオーストリアのウィーン大学で法学の勉強を始め、後に英国に渡って研究を深め、帰化して英国の国際法学者として世界に名を馳せた法律家が展開した条約解釈論である。この人は、1950年代に万国国際法学会という民間の学術団体が条約解釈の研究を行なったとき、その報告者として、古くから判例の多い仲裁裁判の中に見られる、条約起草過程の作業を重視する傾向を取り上げたのである。その報告書に対して、英国外務省法律顧問局で長年実務を担当した一会員が加えた批判の手厳しさは、今も私の脳裏に焼きついていて。批判はこうだった。「条約は政府間の契約であって、政府が望むならいつでもその起草のために専門家の援助が得られるものである。条約は、国際裁判所が適用する解釈規則について十分な知識を有する専門家によって起草されたものと考えなくてはならない(尤も、現実には、決していつもそうだとはいえないが)。」慎重かつ周到な専門家の手によって仕上げられた文言こそが頼りになる、という考えである。

1969年のウィーン条約の解釈規則は、こういった研究や、公式の会議における議論の応酬という紆余曲折を経て、出来上がったのである。

(MIYOSHI Masahiro, 愛知大学法学部, King's College London, 1973/75)

## お知らせ

今年のGeneral MeetingおよびReceptionは11月22日(金)にMr Barrettのサポートによりまして英国大使館公邸において行われます。ぜひご参加くださいませうようお願いいたします。

## A NEUROSCIENTIST WAS INVOLVED IN ENDING THE GULF WAR IN BRITAIN

Mitsuko HAMAMURA

I have followed the method of Sir W.S. Churchill's *The World War the II* (1958), in which the author hangs the chronicle and discussion of great military events on the thread of the personal experience of an individual. The actions were chronicled with searching own heart.

**\*Aug to Dec/1990:** Invasion of Iraqi soldiers into Kuwait, the capital. Emir of Kuwait fled into Saudi Arabia. Cousin of the Emir defended against Iraqi and died. World-wide propaganda of anti-Saddam Husain, mainly produced by Mrs. Thatcher. Anger prevailed. Gathering Peace Keeping Force into Saudi Arabia, mainly U.S.A., Britain and France. Saddam Husain was keeping foreigners in Iraq as a human shield. Mr. Ted Heath had succeeded in taking the British hostage in Iraq to Britain and then many ministers from the industrialized countries including Japan did so. Therefore Saddam Husain got spot light from the mass communication in the world more than ever.

**\*18/Jan./1991:** The battle started. In the AFRC Institute, one British technician working brought his television to his bench, watching the reporting of the battles which interested me simply because British boys are so excited by these war events. I noticed BBC repeated presenting the film Saddam Husain prayed for God. British Broadcasting always reported the response of British Arabs -- they looked unpleasant and being sympathy with Saddam Husain. Even though having used higher modernized weapons and aeroplane than those of Iraqi, many American soldiers became Iraqi's hostage. BBC news showed curious anger facial expression of those American hostages. Anyway at that time my position was anti-war but I was not involved in protest against war in Britain.

**\*25/Jan:** I took private an English lesson by the teacher who had polished my English during the period of the training which was appointed by the British Council. She used for lesson the article of the Times as a material and we read it together. The article on Thursday was written by Foreign Secretary, Mr. Douglas Hurd. It said that, as far as I was impressed, in the past, before the World War II Germans invaded into the other nations also in the Middle East but the other European nations did not prevent it. Then the world war evolved. After reading this something changed in my mind. The idea was totally different from Japanese one; to stop the world war we have to commit the war which is begun by some nation which breaks the international rule.

**\*26/Jan:** I saw Mr. Douglas Hurd on TV. He was upset and saying, "The war is going to defeat." At this moment, as the neuroscientist, I found the association of the repeated presentation of the film Saddam Husain was praying for God, with emotional responses, panic and anxiety, of British Arabs. The stimulus and the response. I understood that the reason for defeat was due to this Iraqi's repeated war propaganda. Fear and panic produce freezing behavior. Soldiers on the battle fields cannot switch on buttons of highly technological weapons properly.

**\*27/Jan:** After some time I noticed something fearful

would happen to us without saying to Mr. Douglas Hurd. That was on Sunday. Usually I phoned to my mother living in Japan every Saturday, so that I had to wait for a week. The reason why I thought I phoned was that I felt someone bugged my telephone. However I thought that to call to my mother coming Saturday would be too late, I did not know why. I decided to talk to my Thai friend. I expected that someone bugged our house. This was the beginning of the commitment of shortening the duration of Gulf War. I was talking to the ceiling of the dinning room of our house in front of her. What could I else do it? "British Broadcasting is helping Saddam Husain. He prays for God. He already won the *psychological war*. If I were the head of the Broadcasting, I would remove the film Saddam Husain prays for God. *Instead I would add the film Emir of Kuwait prays for God.*"

**\*28 or 29/Jan:** The response was quick. The head of the BBC appeared in the TV program, saying, "We have received the claims from the people who watched our news..." I felt very happy and at the same time was embarrassed, so that I switched off the television at our house. Anyway the film disappeared from this time. Then I watched the news showing the young minister of the Foreign Office opened the convention to British Muslim to explain the aim of the war. It was very noisy meeting, some of the Arabic people were shouting to him while he was trying to talk. Anyway this made me very happy and I realized that British government understood what I meant.

**\*Jan:** One day a British researcher asked me in the coffee room, "The reason why Japanese government is supporting the war is that Japanese want oil." I was a little bit annoyed because I was not the representative of the Japanese government and even was not supported. I answered, "The war is mainly due to the lack of communication between the West and the Arabs. *Saddam Husain is cunning*. He is taking human shield. He prays for God. He tried to be seen the battle was for God. He has to withdraw from Kuwait. At present it appears that the battle is between the Christians and the Muslims. It is not good. Next time the battle would be between the Hindus and Muslims or between the Hindus and Buddhists. " The British said, "There is no Briton who talks on behalf of Arabs like Lawrence of Arabia." This further annoyed me. Why should Briton talk on behalf? Why shouldn't Arabs talk on behalf of Arabs? I said, "The United Nation is the only association, at present, which resolved the problem. At present it is managed by Britain and the United States. This is because of historical reasons. We have to force the battle between the Arabs. Otherwise we would loose our credit on the United Nations." What I pointed out was that Saddam Husain replaced war aim by psychological methods such as repeated presentation of gesture praying for God, from territorial invasion to religious struggle.

**\*Jan:** Next morning news demonstrated that the committee of the Security Council of the United Nations was opened and discussed about the issue.

**\*Jan:** The attitude of U.S. President Mr. George Bush changed: the TV news showed American Football Game, he was saying something like "The United States is backing young soldiers being involved in the operation in the Desert Storm" accompanying black children, kids of the young soldiers in the Saudi Arabia. The BBC news showed the black American soldiers jumped high because he felt as if he was like a hero attacking the evil on behalf of the U.S. The President appeared

to raise the martial spirit of the American soldiers.

**\*Jan:** The condition of the war changed. BBC TV news showed General Schwartzkopf's concern about the *psychological war* -- the word of which I created. British psychologists belonged to the British Army were sent to Saudi Arabia. The TV news said, the Peace Keeping Forces in Saudi Arabia started the propaganda calling surrender against the Iraqi soldiers operating in the front line. They propagated the thousands of leaflets. BBC news said that this was the same technique as that Japanese Army used in India during the World War II. I was embarrassed. Many Iraqi soldiers, especially the young -- sometimes the old, looked like high position -- who showed a shortage of food and water lifted the white flag to the U.N. Peace Keeping Force. The Forces looked embarrassed by the enormous number of Iraqi soldiers who had surrendered. I thought it was peaceful way of ending the war because the both sides did not lose their young people. I was surprised to see that logic of neuroscience, removal of the repeated presentation of the film Saddam Husain praying for Alar, worked.

**\*Jan:** It was like a secret club. In the news many young representatives expressed their view which were consistent with what I had talked. We were happy because the logic guided the man's behavior. The young minister from Israel, who controlled the information in his country, talked that Israeli had to credit individual culture in each race and credit Arabic people. I also heard the young representative from Foreign Office from the Soviet Union agreeing with new idea. What a splendid thing!

**\*Jan:** BBC showed the news that the British Foreign Secretary Douglas Hurd met the German Foreign Minister who had decided to pay money to the U.N. Peace Keeping Force. Until this time enormous number of German people were involved in the protest of the War. The movements looked so large that German Government appeared to force not to pay. Some British journalist asked German Foreign Minister, "Why now?" He answered, "If Turks were attacked, we would save them." He meant that Germany avoided the war between Christianity and Muslims. Then it appeared that the German Foreign Minister was busy at saving Israeli people who had been attacked by Iraqi Army. What a difference from Japanese! Both people were involved in heavy destruction during the World War II.

**\*9/Feb:** Explosion of bombs in London targeted to British War Cabinet. This broke our euphoria.

**\*Feb:** The Foreign Minister of Iraq started negotiation with Mr. Gorbachev. It appeared reasonable because he was the responsible person of the Soviet Union, one of the five member countries of the Security Council of the United Nations. One morning the television news showed: the United States and British looked embarrassed if the war ended at that time, Iraq would get the good card in the international community. The Senate Majority Leader Bob Dole in the U.S.A. was saying, "We paid for young people." This impressed me because the head of each government who had responsibility on their young people did burdens on not killing them. After finishing news the French guy asked me in the kitchen what was about the morning news. I explained him the Iraqi behaviors and added, "I understand the feeling of the U.S.A. They paid for young people. But Iraqi's logic is strong. (They tried to stop the war.) We have to wait until 9 o'clock

news." The French guy kept silence. At the 9 o'clock news of BBC, the President George Bush said, "Iraqis are trying to end the war. But *Saddam Husain is cunning*. He would break the promise. We would start combat in the evening if Iraqi government really withdraws from Kuwait." The combat started again. I was very happy about these events. It appeared that what I had thought was understood by somebody whom I had never met.

**\*28/Feb:** I got on board from London Heathrow to Munich. I visited the Max Plank Institute in Marstried near Munich for giving a talk. This travelling was planned before the commitment of the Gulf War. In the evening the German scientist carried me on his car, stopped on the way to the German restaurant, switched on the radio and suddenly we heard that the Gulf War was over. The voice was the Secretary of the States, Mr. James Baker's. I suddenly said, "Saddam Husain is a trouble maker." The German scientist also said, "Saddam Husain is a trouble maker." At the restaurant he asked me, "Would German and Japan be in league with each other?" I was hesitated. We talked on the German protest against Gulf War. He said, "There is no more than reasonable degree of protest against war." The Gulf War unveiled the feelings of the last war. It seemed to me that negative heritage was so sad to their offsprings.

**\*7/Mar:** Invited seminar at University of Hamburg.

**\*8/Mar:** I saw Mr. James Baker. But that was strange, in the newspaper, he was travelling in the Middle East to negotiate Peace Talks between Israeli and Arabs.

**\*10/Mar:** I got on board from Hamburg to London. At the custom of Hamburg Airport the German officer said to me "A-ri-ga-to-u" without checking my passport with good atmosphere. I read the Times, saying that some young intelligent claimed that Emir of Kuwait and the Prime Minister of Kuwait did not come back to Kuwait even after the battle was over. Saying that the U.N. Peace Keeping Forces were trying to recover Kuwait city, they did not. Anyway the Prime Minister of Kuwait were forced to come back. I understood how British felt. What were we fighting for? After letting the intelligent know that the Prime Minister was the son of the Emir of Kuwait, the young guy answered, "I do not know he belongs to the royal family." The note was added that the members of the Conservative would nominate him as a candidate of their party, because he said on behalf of British young soldiers. I thought that it was a sophisticated way to criticize the policy of the other nation. On the way to my hotel in London, in the subway, I saw the newspaper which showed a British soldier holding his pretty kid high. It was as if he congratulated what he was alive. This also made me happy. I also read the note in the newspaper, "We can get how to win the war. At first the government should clear the war aim. Secondly the electorates believe the government. Thirdly the troops carry on their duties under this rule." In the evening BBC TV news showed the Prime Minister of Kuwait returned back to Kuwait by aeroplane, sat on the ground and *prayed for Alar in front of the people for the first time*. I was rather embarrassed.

**\*11/Mar:** I got on board from London Gatwick to Narita. I finally realize that it is a tradition for British scientists to be involved in the war event.

(濱村みつ子, 九州大学歯学部, Department of Neuroendocrinology, AFRC Institute of Animal Physiology

## 最近東海地方を訪れた二人の英医学者

藤田道也

去年から今年にかけて東海地方を訪れた二人の高名なイギリスの医学研究者にお会いする機会がありました。お一人はSir Andrew Fielding Huxleyで、お会いした場所は岡崎市の国立共同研究機構生理学研究所。サー・アンドルーは高名な生理学者でノーベル賞受賞者であり、今回は外国人として最初の勲一等瑞宝章受章の機会に来日されました。氏はダーウィンの進化論が激しい非難を浴びていた当時のその熱烈な擁護者として知られる生物学者トマス・ハクスレーの孫に当たられ、小説家オルダス・ハクスレー、医学者ジュリアン・ハクスレーの異母弟に当たられます。理学研究所でのご講演の演題もしたがって、"Thomas Henry Huxley: a grandson's view"とした。

講演の内容はトマス・ハクスレーの自伝に基づきトマスの生い立ちや彼の性格、当時の学界の状態、トマス自身の立場と信念などに関するもので、スライドを用いながら行われ、直系の子孫で自身最高の医学者による口語体での伝記であり、会場も生理学研究所のこじんまりした会議室であったため、トマス・ハクスレーをより一層身近に感じることができ、聴衆に大きい感動を与えました。

会后氏を囲んでパーティーが開かれ、私も同期(1967)のブリティッシュカウンスシルスカラーでサー・アンドルーが当時主任教授をされていた教室(University College, London)に留学していた山田和廣さん(現大分医大教授)とともに出席しました。じつは私たち二人は今から約30年前のその頃もロンドンでまだ現役であられたサー・アンドルーを囲むあるパーティーに出席していたことを思い出しました。(まさか、東海地方で開かれたパーティーでまたお会いできるとは予想もしていませんでした。)

私は偶然手元に以前神田で手に入れたサー・アンドルーの尊父であるレナード・ハクスレーの著書: Life and Letters of Thomas Henry Huxley (Macmillan, 1990)を持っていたのでそれを当日持参して、サー・アンドルーをお願いして本の扉に次のような書き込みをしていただいた: "Andrew Huxley, 17 Nov. '95. Son of Leonard Huxley". おかげで、私のこの本は世界で唯一の貴重なものとなった。感謝々々。もう一人の有名な英医科学者は現ロンドン大学(やはりユニバーシティコレッジ)の解剖学教授で脳の視覚中枢の研究で有名なゼキ教授(Professor Zeki)である。氏は高性能の光増倍管で世界的に名の知られた浜松の企業が3年に1度開催する脳と心のシンポジウムに招かれて出席するために筆者の住む浜松市に來られた。氏は"Functional specialization of visual cortex and its consequences"という演題で格調の高い講演をされた。それはアメリカから参加していた研究者の会話調の完成度の比較的低い講演とは別格のものであった。

じつは、講演の前の日の夜のレセプションで幸いにも氏とうちとけた話をする機会に恵まれ、氏がその姓のゼキ氏によれば"I am almost Japanese"、じつは氏の先代の出身はレバノンから感じられるのとはほど遠くきわめて英国的ユーモアと人柄の持ち主であることを知っていた。私はプログラムからゼキ教授が見えることは知っていたがまだ氏の顔を存じ上げなかった。レセプションで私は色は白いが一見日本人と見間違えるような、手持ちぶさたそうな外国人とすれ違った、2度目にすれ違ったときやはり手持ちぶさたそうであったので自己紹介するとそれがゼキ教授なのだった。氏は日本人はエレガントだとおっしゃる。これは英国流の皮肉ではないかと思っしてリージェントストリートの日本人買い物客だとかいろいろひんしゅくを買っていきそうな例をあげたが、あくまで

もelegantであると主張されるので、これは本当かもしれないことにして顔面どおり受け取ることにした。氏はこれまで日本で行ったところは(シンポジウム開催地の浜松は別にして)東京、京都、萩だと言う。なぜ萩なのかという疑問に対する答えが振るっている。ある時京都の古い寺へアメリカ人夫婦と一緒にいったらその巨大な(huge)アメリカ婦人が氏に向かって<日本で一番おいしいハンバーグを食べられるところへ案内してほしい>と言った。そこで氏はまかしておきなさいとばかりにノゾミに飛び乗って広島の方こうのなんとかいいう駅(小郡?)まで行きそこでレンタカーをして萩へ連れて行ったというのである。とても鄙びた往時の日本が残っている町だったようだ。

(FUJITA Michiya, 浜松医科大学, BCS, 1967/68)

## 3人の恩師

津山直一

私は1955年から56年にかけてB. C. Scholarship Holderとして、主としてLondonのRoyal National Orthopedic Hospital (Institute of Orthopedics)に留学を許された。このことは今日に到るまでの私の人生において最も有意義かつ幸福な体験であった。帰途ドイツを訪れているうちスエズ運河が不通になりケプトタウン経由となる貴重な経験もした。英国で最も印象に残るのはGolders Green近くの下宿のlandladyとの出会いである。彼女から英語、英国式ものの考え方やマナーにつき教えられ、その後英国に行くたびに毎回訪れ、10数回に及んで親交を続けたが、数年前他界した。

第二はLondonに近いStoke-MandevilleのSpinal Cord Injury Centreで、故Sir Ludwig Guttmannに短期間であったが師事できたことである。先生から脊推損傷者のリハビリテーションにつき革命的な新しい考え方を教わり、今日の私のリハビリテーション医としての基礎作りをする機会を与えられた。

第三はRoyal National Orthopedic Hospital において故Sir Herbert J. Seddonに師事し、末梢神経損傷、麻痺性疾患の機能再建等につき実に数多くのことを教えて戴いたことである。先生の遺された整形外科でも最難問である腕神経叢重度損傷修復の問題は、日本に帰ってから研究を続け、肋間神経移行による世界の人々が教わりに来る研究を完成することができ、1990年5月にはInternational Symposium on Brachial Plexus Injury in Tokyoを世界各国の斯界の研究者を集めてプレスセンターで開催し、この学会ならびに刊行物一切を恩師故Sir Herbert J. Seddonに捧げ、師恩に報いる一端とした。

留学中にほかのものに換えることのできない人生の宝物というべき貴重な教えを下さったこの3人の忘れられない方々に対する感謝の念を思い起こしつつ暮している昨今である。

(TSUYAMA Naoichi, 東京大学名誉教授, 国立身体障害者リハビリテーションセンター名誉総長, BCS, 1955/56)

## 短信

昨1995年のEaster TermをCambridgeのClare Hallですごしました。大学院生だけのcollegeで、visiting fellowは教育義務を負うことになっていますが、わたしと同じ専門の学生は皆無に近く、負担も楽でした。

本1996年1月、ロンドンのRoutledge社から何年もの苦勞の結果である次の本が出版されました。

"Lauderdale's Notes on Adam Smith's Wealth of Nations" その苦勞話の一端を本1996年4月号の「学燈」(丸善)に書きましたので、ご笑覧ください。

## Rさん一家・グーンヒリ観測所・皆既日食

木村精二

1966年の冬。ロンドンのパディントン駅8時30分発ペンザンス行きの急行列車に乗り込んだ。30分ほどでウィンザー城の近くスラウ駅を通過、美しい緑に囲まれた田園風景がどこまでも続く。その前の年、列車の中で知り合ったコーンウォール地方在住のRさん御夫妻からの手紙に対して、次のように答えたのだった。「・・・貴方のお近くを私のために案内して下さいと知って、嬉しく思います。お差し支えがなければ、1月22日にお伺いしたいと存じますが、ご都合が悪ければ、別の日をお知らせ下さい」。折り返して、Rさんから次のような返事に接した。「・・・はるばる訪問して下さいとは大変喜ばしいことです。何日間泊ってくれますか。列車の切符をレッドルース (Redruth) までお買いなさい。到着時刻を知らせて下されば迎えに出ます。・・・子供たちはとても期待しています。そうそう忘れないうちに聞いておきますが、食べ物好き嫌いがあれば教えてください。私達のゲストとして御招待いたしたく、ぜひゆっくりと寛いで下さい」。

パディントンを出発してから6時間17分、列車は時刻表どおりに、終点から30キロ手前のレッドルースに滑り込んだ。小さい田舎の駅、ここで数カ月ぶりに、小学生の兄妹パーシバル君とスーザンちゃんを連れてRさんに会い、車に同乗させてもらって、西へと向かう。ペンザンスを経て、やがて夕闇の迫るころ、人影の全く絶えた海岸へ辿りついた。真冬だというのに、しかも風がもろに当たる高い崖の上なのに、ほとんど寒さを感じない。物の本によると、コーンウォール地方はイギリスで(南の島を別にして)最も温暖な地。理科年表を良ると、プリムスの年平均気温は10度を越し、北緯50度付近では最も温度の高い所である。ここがイギリスの最南西端 Land's End、夏には観光客が群れ集まって、足元のゴロゴロした石の角がとれてしまうほどで、崖のふち近くにあるお休みどころが最も先端にある First & Last! House という建物、などという説明をRさんから聞いているうちに、あたりはすっかり暗くなり、あわてて車に戻った。7時、ヘルストンの御自宅ではR夫人が温かい食事を用意、待っていて下さったのであった。

久しぶりに家庭のベッドで一夜を過ごし、目覚めたのは日曜の朝。子供たちと一緒に出発、南東に数キロ、車で10分ほどの人工衛星観測所を訪ねた。立て札は SATELLITE COMMUNICATION EARTH STATION と読めた。正式名は Goonhilly Downs Radio Station で、場所は最南端リザード半島の中程にあり、北緯50度の緯線がその近くを通過している。1962年7月10日に通信衛星として打ち上げられたテルスター1号を中継して、翌11日にイギリスとアメリカの間で、アン女王らのファクシミリ写真の送信に成功した。パラボラの直径は85フィート、回転部分の重量800トン、郵政省(GPO)の所属である。数日後にはBBCテレビの協力を得て、初めてカラー画面をアメリカに送信、更に同月19日には、ヨーロッパ合同テレビ番組が大西洋を越えた。

グーンヒリから西へ5分ほど行くとマウンツ(Mount's)湾に面したポルドウ(Poldu)、ここは、1901年に無線電信の父ともいわれるイタリアのマルコーニ(Marconi, 1874-1937)が世界で最初に大洋を横断して無線連絡に成功した場所である。その建物は1934年に取り除かれた後、彼の偉業を永久に伝えるための記念碑が立ち、「・・・ここから北東100ヤードの・・・ポルドウ無線局から初めて信号が大西洋を越え、ニューファウンドランド島で受信・・・」と読み取ることができた。地下に眠るマルコーニは、彼の実験場の近くに、スケールの拵がった類似の観測所が、数十年後に建てられたのを、どう感

じているだろう。リザード半島の先端にあるリザード岬は、ブリティッシュ島の最南端。白いペンキに光る灯台などの建物がひととき目を引く。岸に寄せては返す波、飛び交う海鳥の群れ、暖かい日差し、春半ばを思わせるような野生の花々。すっかり冬である事を忘れたような気がした。Rさん一家のお蔭で、滅多に行くことが出来ないような所をさらにいくつも巡ったあと、かたく再会を約して別れを告げた。

帰国した私は、月間誌『天文と気象』にシリーズ「英国の天文施設拝見」を執筆、その第4回目には「グーンヒリ人工衛星観測所」(1966年11月号)を取り上げた。上記までの拙文は、その一部に手を加えたものである。8年後の74年、イギリスを再訪したとき、文通を続けていたRさん宅まで足を延ばす余裕は見出せず、電話で挨拶を言い交わして、次のチャンスを期待し合った。が、その「次のチャンス」が到来する前に、ご夫人から悲しい便りが届いた。80年4月19日にご主人との永遠の別れを迎えた、という知らせであった。翌年11月スーザン嬢が結婚、どんなにか父親に晴れの姿を見て貰いたかったことであろう。83年10月ようやく実現したR夫人との再会は、なぜかレッドルースではなく隣のトゥルーロー駅。子供と迎えに行くから、と喜びに満ちた手紙を下さった夫人の顔は、冴えなかった。一緒に元気な姿を見せるはずのパーシバル青年がとうとう現われなかったのである。訝った私の問いに答える夫人の声は低く、涙が混じった。文字に残すには余りにせつな過ぎる事情が起きていた。失業率の急増が、どんなに多くの若人の心身を傷つけたことが。

今年1996年のある日。イギリス天文協会BAAの機関誌に載った"1999年8月11日の皆既日食の気象条件"という記事を拾い読みして、"Goonhilly Earth Station"という地名が筆者の目に入った。3年後にイギリスで見られるこの日食の皆既帯はコーンウォール地方を横切るが、同中心線に接近しているBT(日本のNTTに相当する)所属のこの地上局の敷地が、観測適地として選ばれた場所の一つだというのである。もちろんヘルストンの町も中心線に近いではないか。満30年前の思い出に耽っていたとき、ペンザンスを生まれ故郷に持つBAAの友人Cさんより、日食を見に来ないか、同地にある知り合いのホテルを予約するから、という有り難い勧めの手紙が届いた。英国で数十年振りに起きる黒い太陽を、かつてRさんに案内していただき懐かしい思い出に満ちたグーンヒリ近辺で、じっくり眺めることになりそうである。Rさん一家のどなたかとの再会が実現するだろうか。

(KIMURA Seiji, University of London, 1965/66, 76)

The British Council's Internet World Wide Web Site was officially launched on 3 July 1996. Services include: **Britain Direct** - a guide to authoritative sources of information in Britain; **Showcase** - a gallery of British expertise and talent; and targeted services, such as the postgraduate information service. The Web address is :

English: <http://www.britcoun.org/>

Japanese: <http://www.gate-uk.co.jp>

## Dr. Roberts

黒澤 和

私は英国では1964～1967年の3年間をポストドックとしてSheffield大学で、また、1982年10～11月を共同研究の目的でBristol大学で過ごした。Sheffield大学では大学から給料を頂いたが、2度目はBritish Councilから往復の旅費を頂いた。以下は1度目のときの話である。

Richard John Roberts 博士は1993年度のノーベル医学、生理学賞受賞者である。1965年9月、当時英国 Sheffield大学化学科でポストドックをしていた私の実験室にボスのOllis教授が来られ、「今度、大学院に入学したRoberts君だ。実験の指導をしてやって欲しい。」と言って紹介されたのが彼との初めての出会いであった。彼は英国南部の Bath市の出身だが、6月にSheffield大学の化学科を卒業し、引き続いて進学したものであった。研究テーマは私と同系統のブラジル産レグミノザエ(豆科)の植物成分の分離、構造決定で、全部で5人が研究していて、一応私がリーダー格で仕事を進めていた。

これらの植物からはイソフラバン、ネオフラバン類が数多く分離され、彼の場合も分離できたものは、ほとんどことごとく新種であったものだから、Ollis先生の覚えもめでたく、本人も乗りに乗って、実検に精励していた。これらの化合物の構造解析はプロトン核磁気共鳴や赤外線吸収スペクトルを使う、いわゆる分光学的な方法であって、液体、結晶の区別なく、しかも多少不純な物質にも適用できるものである。もちろん彼はこの方法は初めてなので、ほとんど私が解析してあげたが、要領の良い人であったので、すぐ自分でできるようになった。

次の年だったと思うが、Sheffield大学で"芳香族性"についてのシンポジウムがあってProfessor WoodwardやProfessor Dewar などのそうそうたるメンバーが集まって講演をしたが、その懇親会で、今でもフラボン類の研究をしているアイルランドのDublin大学のProfessor Donnelly とDick (Richardの意)と私の3人で話をしたが、彼が自分の研究の成果を滔々とまくし立てたものなら、彼女(Professor Donnelly)は黙り込んでしまい、少々気の毒な感じがした。1年余りが過ぎて、「もう1人で研究できるだろう。」と判断したのか、Ollis教授は彼を別の実験室に移し、その後はお互いに実検成果を知らせあって、研究を深めていった。

彼はチェスやクロスワードパズルが大好きで、私もチェスの手ほどきを受けた。日本の将棋や碁にも興味を持っていて、小さい碁盤と碁石をプレゼントしたときは大変喜んで、早速碁のやり方を勉強していた。解説書なども持っていたようである。2年半たって妻の幸子がSheffieldに来て、英会話ができないのでDickを通して奥さんのElizabethに頼んだら快く引き受けてくれて、長女のAlisonが生まれたばかりだったが、何回かフラット(アパート)にお邪魔していた。

別の実験室に移ってからはしばらくして、彼の友達から「彼が実験をあまりしないので、Ollis先生から叱られた。」と言うような話も聞いたが、こちらの出る幕ではないから、そのままにしておいた。渡英以来3年が過ぎて、その半年前から熊本大学に奉職することが決まっていたので、その間の研究成果を12編の論文原稿にまとめ、帰国した。Dickと別れるときに、今後は手紙でチェスをしようということになり、勿論1回に1手しか進まない訳だが、しばらく続いて、彼がBostonに移った後、こちらも忙しくなり、面倒になったので止めてしまったが、今考えれば残念である。

彼は博士の学位を取得後、Harvard大学の生化学でポストドックをした後、New YorkのCold Spring Harbor 研究所へ移り、そこで今回受賞の対象になったアデノヴィーユスのタン

パク質を作りだす遺伝子(DNA)がいくつかに分断された形で存在していることを発見した。現在はNew England Biolabsの研究所長をしている。受賞のお祝いの手紙を送ったところ、丁寧な返事をくれて、Sheffield時代に私が彼を指導したことについて、なにやら過分な評価を頂いた。昨今日本の学生気質も変り、従前の指導方法だけでは学生諸君が興味を示すことが少なくなり、私も少々自分の教育方法に自信が持てなくなった感じがなくもなかったが、彼の手紙によって、私の指導方法もそれほどの外れでなかったことが分かり、安心した。(KUROSAWA Kazu, 熊本大学理学部, Bristol University, 1982, kurosawa@aster.kumamoto-u.ac.jp)

## 寒い国で暑い国の研究

小倉暢之

私がブリティッシュ・カウンシルのスカラシップに応募したのは、そもそも亜熱帯の地沖縄に赴任して熱帯の建築についてよく知ろうと思ったのがはじまりでした。私の勤務する学科は新設の建築系学科で、教育研究の基本は本土のものをを用いているのですが、我が国の建築基準法の様に北海道から沖縄まで同一の物差しで物事を決めてしまうようでは特色が無い訳で、何か面白い話はないものかと考えていたところでした。沖縄で沖縄を研究するののも一つの方法ではありますが、建築計画を行う上では同じ様な気候条件の中で作られる外国の建築にも目を向けて見ようではないかと考えた時に熱帯地域に深い関わりのある英国での研究を思い付いたのでした。

早速、ブリティッシュ・カウンシルをはじめ、R.I.B.A. (Royal Institute of British Architects)等に紹介状を送って適当な研究機関を探し、結局ロンドン大学 Bartlett SchoolのD. P.U. (Development Planning Unit)を見つけ出しました。D. P.U.は建築系の大学では珍しく開発途上国の開発計画を専門に扱う大学院大学で、この分野では世界でもパイオニア的存在の研究教育機関であることを知り驚きました。というのも我が国の建築系大学には途上国の建築問題を専門的に扱うところは無く、全く未開の分野であったからです。まるでジャングルの中へでも入って行くような感じでした。

スカラシップを頂く上で受け入れ体制を整えて置く必要がありました。そこでD.P.U.とやりとりすると研究員として受け入れる余裕がないのでディプロマコースの学生として来てくださいとのことのでその様にしました。しかし、制度の融通性が大きい事にも驚きました。入学後、指導教官との面談で講義を履修せず、特別研究のみでコースを修了できるようにして下さいました。テーマは東西アフリカにおける近代建築の気候への適応過程でした。結果的には学生の方が良かったとも思います。というのも指導教官との繋がりが強くなり、毎週一回定期的に進行状況の報告とアドバイスの時間がとれた事、その上、英国内やアフリカ各地の多くの研究者や建築家等を紹介して頂いた事です。この国の研究者間のソフトなネットワークの強みを実感したのは私だけではないでしょう。

熱帯建築の研究環境として英国を選んだのは大変良かったと思います。期間中にアフリカ4か国を訪れましたが、文献に関しては現地の図書館よりロンドンの図書館の方が圧倒的に多く、しかも系統的に整っています。また図書館スタッフの専門気質も素晴らしく、難問、珍問によく応えてくれました。取り分けR.I.B.A.の図書館は建築家のファイルが整っていて大変助かりました。お蔭で熱帯近代建築のパイオニアとして有名な故Maxwell FRY氏に生前インタビューに行った時は、「手紙の質問には返事を書いておいたし、仕事の詳細はファイルにあるから、それよりも今日はワインの作り方を教えて上げよう。」といわれ、楽しい一時が過ぎました。

一応準備を整えてアフリカ旅行を二度計画しました。各々



一ヶ月間でしたが、これまた印象深い旅でした。初めて見るアフリカは「百聞は一見にしかず」の如く、図書館の机の上では想像できないものでした。英本国では一般に近代建築よりも煉瓦造の古い様式が好まれるのですが、アフリカの近代建築はその逆であり、何故そうなのかが実感できます。幸い近代建築の建っている所はホテルとラガーには事欠かずに済みました。実感といえば気候条件の違いもそうでした。ロンドンの真冬にアフリカに行ったのですが、一月も忙しく動いていると、真夏のアフリカではロンドンの寒さをつい忘れ、夏服以外は他の荷物と一緒に郵送してしまったのでした。後の後悔先には立たずといいますが、ヒースロウ空港からノーザンラインのフラットまで氷点下の道中Tシャツで帰った男を見て不審に思われた市民は多かったのではないかと思います。ともあれ、アフリカ各地でもブリティッシュカウンシルの方々にお世話になった事を有難く思っております。お蔭様で約一年足らずの間で随分まとまった成果を上げることができました。アフリカ建築旅行の様子については、拙著「建築探訪6 アフリカの住宅(丸善, 1992)」でご紹介しております。

あれから10年になりますが、その後も恩師のPatrick WAKELY先生(現在D.P.U.部長)とはコンタクトをキープしておりまして、昨年は琉球大学へお招きする事ができました。今回の来日では、途上国の深刻な都市問題の現状と今後の先進国の役割について興味深いセミナーを大学スタッフと催しました。今後ともD.P.U.との交流を計って行きたいと思っております。

(OGURA Nobuyuki, 琉球大学工学部, University College London, 1984/85, oguranob@tec.u-ryukyu.ac.jp)

## ケム川の流れば絶えずして・・・

池島大策

20年ぶりに再訪したケンブリッジは、昔ながらの面影をそのままとどめていた。ケム川の流ればバックスの緑も、キングスチャペルの偉容さも昔のまま、と到着したばかりの自分には思えた。

このたび、英国ケンブリッジ大学での在外研究より無事帰国したが、ケンブリッジの土地は、写真で見る以上に美しかった。景色や建物の美しさは、なにもケンブリッジに限らず、英国では都会を離れれば離れるほど美しくなるということを実感した。とりわけ私の目を引いたのは、大学カレッジ内の非常に手の行き届いた芝生であり、花壇であった。

在英中に、家族から送られてきた本の一節を紹介しよう。ケンブリッジのトリニティー・カレッジの前庭で、参観に来たアメリカのある大富豪が、ローラーを押しているみすばらしい身装の園丁に十円札をつかませて、芝生の手入れの秘訣を尋ねた。水をやりなさい、ローラーをかけなさい。そして掌中の十円札と富豪の顔を見比べている。謎が判ってアメリカ人は、もう一枚紙幣を載せてやる。水をやりなさい、ローラーをかけなさい。さすがに少しむっとして富豪はあと十円つけ足すと、そんなことは判っている、と怒鳴った。おもむろに三枚の札を懐中に捻じ込むと園丁は云った、それを毎日繰り返して五百年経つところなるんで。(池田潔著『自由と規律・イギリスの学校生活』岩波新書、1945年 63-64頁。)

このように、英国は何事も歴史の古さを持って良しとされるところが過分にあることはいまでもない。その点で私の所属する湘南藤沢キャンパス(SFC)は、アメリカのキャンパスを模倣したせいか、そのデザインがモダンで奇抜ではあるが、自然豊かな「シベリアンキャンパス」とも呼ばれるのは、歴史の浅さや建物の外観の故だけでなく、地理的位置や授業の忙しさ等が学生にとって半端でないという意味であろう。

ケンブリッジの街自体は、小ぢんまりとしていて、街に出れば大学の教授陣・研究者や学生諸君に必ず出会うほどの規

模である。センズベリ(Sainsbury)での買い物では、顔見知りの学生や近所の人に出会わないことはなかった。狭く曲がりくねった通りも多く、古式ゆかしい街並みがかえって交通渋滞や大回りをしなければならないという不便さをもたらしていることは否定できない。東京に住み慣れた私にとって、こんな生活に当初戸惑うこともたびたびあった。しかし、日曜日に大学の教会であるグレート・セント・メアリー教会にいくと大学関係者にもよく顔を合わせたし、ケンブリッジ大学の研究員であるというだけで、縁もゆかりもない人が話しかけてくれたり良くなってくれた。教会の牧師さんは来て間もない私をお宅に招いて昼食をご馳走してくれた。また、あるカレッジの学長の未亡人は、私が単に近所の人だというだけで、彼女が四季折々に主催する有名人同士の昼食会によく招いてくれた。更に、自分の所属していた研究所の所長が日曜日の朝いきなり、「かみさんがいないので昼食でも食べに来い。」と電話をしてきて、ローストビーフとヨークシャーピングをご馳走してくれたこともあった。

「イギリスの食事はまずい」とよくいわれるが、幸い招かれた食事や旅先での外食でも「まずい食事」に出会わなかったのは、私が運が良かったからではあるまい。だいたい、「イギリスの食事の神髄は家庭料理にある」とはよく言ったもので、やはり、招き招かれしないと美味しいものには巡り会えないのではないか。かつて7つの海を支配し、日の沈まぬ帝国といわれたイギリスに、美味しいものと美人が集まらないはずはない、というのはあながち嘘ではないと思った。

イギリスは天候が悪いことでも有名だが、私にとっては、5、6月の初夏の美しさと、太陽のまぶしさばかりが記憶に残っており、印象的である。観測史上初めての暑さと日照り続きを経験したその年の夏は、日本のじめじめした蒸し暑さよりも、格段に心地がよかった。到着したばかりの晩夏には、何日間かの小雨が続いたが、研究所の友人に「このようなどうしよもない天気がこのまま来夏まで続くんだぜ。イギリスへようこそ!」と真顔でいわれたときには、内心そうだろうかと半信半疑だった。それでも、日本ほど乾燥しておらず、どこへ行っても、セントラルヒーティングや床暖房が効いている英国の冬は、厳しく感じられなかった。

やはり、外国に実際に行って生活してみなければ、その国の本当の良さはわからないし、「住めば都」であると思う。どれだけリンボウ先生、マークス寿子女史の本を読みあさってみても、イギリスの食事を味わい、天気を体験してみなければ、悠久の歴史や伝統に裏打ちされたその「味わい」もわからないのではないだろうか? こうして貴重な身を持った経験をする事ができたのは、プリカン(BC)・フェローシップの奨学金のおかげである。記して感謝を申し上げたい。

(追記)今夏、国際会議及び在外研究・調査のため、またケンブリッジの地を踏むことになった。やはりケム川は、絶え間なく流れていた。

## 図書紹介

Studying and Living in Britain, Northcote/ The British Council eds, pp112, 1400yen

ロンドン暮らしのハンドブック、英国日本婦人会編 1500円

British Publishers' Agents and Representatives in Japan, ブリティッシュカウンシル図書館編 pp28, 500円

上記購入ご希望の方は直接ブリティッシュカウンシル図書館(〒162 新宿区神楽坂1-2, tel 03-3235-8031)へお問い合わせください

## 英国留学とその後の28年

片山志富

今を去る27年昔の1967年、時の東京大学学長茅誠二先生や東京外国語大学学長の小川芳雄先生の面接を受けて、合格、生まれて初めてジェット航空機に乗って生まれて初めて外国へと旅だった。BOAC機で香港、バンコック、ニューデリー、テルアビブを経て28時間でロンドンのヒースロー空港に降り立った感激は未だに忘れない。途上、香港ではトイレに入り、出るとき、出口にいたおじさんがタオルを出したので何と親切な人だろうと感謝し、手を拭いて、有り難うと言って去ろうとしたら、チップチップと追いかけてくるので、ああここは外国だったと改めて実感した。

UMISTではICIの主席研究員兼UMISTのReaderであったDr I. Goodman(後Bradford大学のProfessor)と仕事をしたおかげで、大学だけでなく天下の企業ICIも訪れることが出来、各国の指導的科学家と交友する機会もえた。実験科学の元祖の国であり、産業革命の発祥地である英国の歴史と実績を見聞・体験し感激ひとしおのものがあつた。研究結果は英国の学術雑誌は勿論、帰国後も日本の学術雑誌にも報告出来た。

妻もBCで大変お世話になり、その紹介でNight schoolで英語の勉強をしたり、Manchester市長の晩餐会に招待されたり、いろいろな集まりを通じて多くの英国の人々や諸外国の人々と接する機会をえて、その後の人生に良い影響を受けている。

幼い息子も住居目前にあつた女子用Grammar schoolの女学生に可愛がられたり、近所のガキ大将たちにも遊んでもらい、また、動物園や公園、遊園地に行くなどすばらしく楽しい日々を過ごした。帰国したときは祖母に英語で話しかけ祖母をこまらせたものである。当時マンチェスターにはわずか5組の日本人家族しかいず日本人の子供は珍しく思われたのである。

England, Scotland, Walesの各地もめぐり、各英国の人々は勿論ヨーロッパ大陸、南北アメリカ、アフリカ、アジアなどから来た多くの人達と会い多くの友人が出来た。研究は勿論のこと、人々、風土、その他いずれをとっても英国はすばらしい国であつた。家族全員が楽しみ、嬉しく為になる日々を過ごすことが出来た。

一方、日本では安保関連の学生騒動がおこり、東大安田講堂の焼き討ち事件などはBBCのテレビで見た。この後東大の合同卒業式は長い間行われなくなった。更に2年間いて欲しいというUMIST側の要請があつたが日本の大学から安保関連騒動で困っているのだから帰るよういわれ、やむをえず所定の計画より早く帰国せざるを得なかった。

帰国してしばらくは騒動の対策など問題が続いた。

数年を経て、故有って大学から民間企業に転じ、科学から技術への展開をするに至り、英国は勿論、アメリカ合衆国、アラブ首長国連邦、イタリア、インド、オランダ、カナダ、シンガポール、スイス、ドイツ、バーレーン、フランス、ブ

ルネイ、マレーシアなどをしばしば仕事で訪れる機会を得た。英国での経験が大いに役だったことは言うまでもない。また、英国で友人になった人々の中には手紙を寄越すだけでなく、実際に日本に来た人達もいる。その一人の例をあげれば、UMISTで化学でPhDを取りICIに勤めていた人物が、私を頼ってきて、東京大学で社会学の勉強をして修士の学位も得て、帰英後は独立して日英の技術を中心に扱う弁理士の仕事に転身して成功している。また英国電気学会IEEの人達が日本の代表的企業の視察に来られ、駐日英国大使館の方達とお世話をしたこともある。

自分自身の仕事で英国と関連したのは、金属腐食に関してCambridge大学とManchester大学の教官達と討議・会合したり、計測機器部材を複数の代表的な英国のセンサー機器メーカーから輸入してそれをもとに新しい計測機器をつくるなど

少なくとも、現在も続いている。

英国滞在時、長男は幼い子供であつたが、そのころ撮った8mm映画や35mm写真、録音などをしばしば見せたり聞かせたりしたため、英国やヨーロッパ大陸の記憶を持ち続け、大学に入ってから2度も英国内の旅行とヨーロッパ諸国巡りをしている。勿論自分が昔住んだフラットも訪れ昔のままにあることも確認した。

長男の卒業式は、先に述べた安田講堂で、なんと安保焼き討ち以後初めての合同卒業式となつた。安保最中に私の卒業式があり、英国滞在中に安保焼き討ちで中断し、長男が安田講堂合同卒業式の再開後初めての卒業式を迎えたのに偶然の不思議を感じた。

先年、今の皇太子殿下がBCのパーティにおいでになったときは、妻も長男も同席し、長男は殿下と英国についてお話しをする機会をえて本人は勿論家族全員で感激した。

長男は今29歳の医師で大学病院で研究している。いずれ、英国で研究に従事する日も遠くないと思っている。

ここに、女王陛下と英国国民の皆様、日英両BCの皆様もお世話になった皆様に、28年後に還暦を迎えた今年、深く感謝申し上げます。次第であります。

(KATAYAMA Shitomi, 元秋田大学, 現東京航空計器株式会社 University of Manchester, Institute of Science and Technology, 1967/68)

## 平等と悪平等

早淵 尚文

最近、子どもの運動会に行つて不思議に思うことは、リレー競争でも徒歩競争でも、1位、2位の表彰がなく、まして個人への賞品などは考えられもしないということである。かつては、日頃の学校の授業では一人前でなくても、この日ばかりは大活躍できる子供達がノートや鉛筆などの賞品を山のように抱えて得意気にしていたものである。足の速い子も遅い子も、運動神経の発達した子も、そうでない子も平等に扱うという学校の戦後の民主主義は、一見するととっても正しい。しかし、人間は平等の能力をもって生まれてこない。足の速い子も頭の回転の早い子も、そしてその逆もいて当然である。

公立の小学校、中学校では授業も平等の建て前で、能力別の編成は行われぬ。自然、授業は真ん中へんか、少し能力が劣る子を相手に進められざるを得ない。従つて、能力のある子は物足りないし、劣る子についてはいけない。一方で、全ての人に門戸を開く代わりに激しい競争がある現在の日本の資本主義の社会では、入学試験や就職に際し人間は平等であるなどと理想論ではやっていけないので、親は塾に子をやる以外にない。子は学校と塾の両方で勉強をしなければならぬ

いし、両方の宿題もしなければならぬ。子供らしく遊ぶこともできないし、夜遅くまで街をうろつくことにもなる。一方、学校についていけない子は、非行や「いじめ」などに走る。

テレビや新聞などのマスコミは「いじめキャンペーン」をやって、学校の対応が悪いと批判しているが、それだけで「いじめ」がなくなるはずがない。その証拠に依然、次から次に「いじめ」が起きている。運動会では積極的に表彰し、賞品もあげる。そして、一方で能力に応じてクラス編成や飛び級などを復活させたり、取り入れたりすることこそ、真の平等ではなからうか。

(HAYABUCHI Naofumi, 久留米大学医学部放射線科, Royal Marsden Hospital, 1982/83)

## "Japan's Fight for Freedom"に思う<sup>TM</sup>

俵木浩太郎

1976年夏、私はGlasgow市の博物館を訪れた。そこには当地の造船所で建造された数々の船の模型をケースに納めて陳列しているフロアがあった(記憶はさだかではないが、小学校の体育館よりは大きかったように思う)。興味のおもむくままに次々と見てまわっているうち、ふと、説明プレートに「漣」漢字を見つけた。当然のことそれをよむと、この船はなんと日本海海戦でロシア・バルチック艦隊の司令長官ロジェストヴェンスキー提督を捕獲した駆逐艦なのであった。昭和14年生まれ最後の「皇国の少国民」としては一抹の感慨があった。しかしそれにも増して、あの不幸な「大東亜戦争」を経てなおこうした陳列がなされていることについては、この艦のお手柄がGlasgowの人びとにとっても、さながら、己の郷里出身の力士が本場所で大金星を上げたような喜びであったのだらうと、改めて感じ入ったのであった。そして以後このことはしばらく忘れていた。

<sup>TM</sup>10数年後、私は神田の古書店で"Japan's Fight for Freedom"三巻を入手した。これは数多くの興味ある図版、写真を収め総計1400頁をこえる大型本の、日露戦争戦史である。しかし、より興味深いのは著者H.W.Wilsonによって付せられた序文である。彼は言う。

「日本は正義のために、民族独立のために戦っている。もし敗北せんか、日本は滅び、フィンランドやポーランドの非運に甘んぜねばならぬ。日本は文明の大義のために戦う。すなわちいわゆるイエローペリルについてどんなナンセンスが書かれようと、思慮ある人士にとって、ロシアではなく日本こそが、文明の諸理想、人類の思想の自由、民主的諸制度、教育、啓蒙、総じて言えば、我々が進歩という語によって理解するすべてを代表していることは否定しうべくもないのである。ロシアはバーバリズムと反動の側にある。

日本人びとのこの試練の時にあつての忠誠と献身は英国人にとって教訓とならう。(略) こうした義務と献身の精神をもった人びとはさらに前進するであらう。現状はともあれ、未来は日本のものである。(略)」こうした賛辞の数々に満ちたこの序文はつぎのように結ばれる。

「日本の勝利は偉大な理想に殉ずる覚悟がある人びとの勝利である。それは野蛮な力と物質主義にたいする徳性の勝利である。」

日英同盟下とはいえ、これはひいきの引き倒しもすぎるではないか、と思うのが現代日本人の大方の感想ではなからうか。とりわけ戦後教育で日露戦争は侵略戦争であるなどと教えられて育った日びとにとっては、日本の宣伝工作の一環として出版された文書ではないかと疑うかも知れぬ。しかし、かりにそう思い、そう疑うとすれば、それは著者Wilson氏への礼を失することとならう。彼は1866年に生まれ、1940年に没した英国の著名な海軍軍事ジャーナリストなのである。

また父はLinthwaitとのvicar、母は初代Oxford卿及びAsquithの遠縁にあたり、教育はOxfordのTrinity Collegeにおいて、かのliterae humanioresを学んだというのであるから、この経歴からはVictoria期の典型的な紳士・知識人であると見なすことができる。

であるから、日露戦争における日本の勝利に多大な貢献をした日英同盟は、こうしたタイプの英国人の支持を受けて成立したのであり、またこうした著作が刊行されたということは、当時にあって、たんにGlasgow市民たちだけにとどまらず、かなり広汎な英国人たちが日本の勝利に拍手喝采したであろうことを示す。以後、今日までの歴史の示すかぎりでは、彼Wilsonの見とおしは的中しなかったことになる。日独伊三国防共協定をへて、大陸での戦争拡大をはかる日本の軍部は、日英同盟を日本側で支えた人びとの影響下にある者たちを親英派として極端に敵視するに至り、ついに1941年の対米・英開戦に至るのである。この経緯について大陸とともに太平洋でも米英で対日戦をたたかおうとChurchillが画策したなどという話はこの際は二義的なものとしておいてよい。

この明治日本とVictoria英国とを結んだWilson、その見とおしが大陸における敵国ドイツの同盟国となつてしまった日本によって裏切られることとなる彼にとって、まだしも幸いであったことは、おそらくは、1940年に没したことだったらう。彼の死の翌日、The Timesは死亡記事によって彼の経歴を紹介した(これはOxford University Press刊行のThe DICTIONARY OF NATIONAL BIOGRAPHY 1931-1940に収録されている)。そこには彼の多彩な著作活動が丁寧に紹介されている。しかしそこに"Japan's Fight for Freedom"の名はない。英国が戦っているナチスドイツは自由の敵対者であり、その同盟国たる日本についてはいかなる意味においてもfight for freedomは語られえなかつたであらう。と同時に、日本の敗北を経て、こうした著作が英国人の手によってなり、日本が国際的プレゼンスを高める上で貢献したという史実もまた忘却の淵に沈んでしまったかに見える。私がGlasgowで駆逐艦「漣」の模型を見て抱いた感慨も、立ち入って分析してみれば、以上の歴史的経緯をふまえてのもの、ということになる。

Wilson氏の見とおしは、現状では、はずれたと評価するほがあるまい。そして歴史は彼のその著を意識の外に葬り去つたかに見えることもこれまた当然の成り行きとせざるをえまい。しかし歴史はどの点から見るかによって見えかたがちがってくることもある。であるから"Japan's Fight for Freedom"の立場からあえて歴史を眺めるといふ企ても十分意味をもって成り立ちうる。とすれば明治期の日本が国際的評価を受けた「自由のための戦い」はその戦いへの裏切り者を自ら生み出すことによって、その歴史的意義を失墜せしめてしまったということになる。その裏切り者の正体は、現在の日本人によつても十分明らかにされてはいない。また、かの「大東亜戦争」もじつはこうした意味での「裏切り者」主導によつて戦われたという認識も必ずしも一般的ではあるまい。

しかし英国において過去の日本に好意あふるる期待を寄せたWilson氏について、その名誉回復を望むかぎりの日本人にとっては、まだまだ努力の余地は残っている。すなわち、彼の評価は早すぎたかも知れぬ、しかし、結局のところ日本人たちは自由のために、文明のために、人類の進歩のために戦いつづけてきたことは事実なのだ、との認識をかちうるための努力である。この努力はいまなおなされるに値するものであると私は考える。彼が日本に期待した「徳性の勝利」する日はそう早くくるものではない、と言つても、それはけして単なる言い訳ではない、すくなくともその努力がつづけられている限りにおいては。

(TAWARAGI Kotaro, 玉川大学文学部, University of London)

## 英国留学の思いで

村上正孝

### 1. 英国留学の経緯

一度はヨーロッパに留学したい。英会話もbrush up したいし、忙しさに埋まり切っている自分とその研究環境を外から見つめたいという願望があった。

幸いにも当時、私の勤め先の勝沼晴雄教授(東大・医・公衆衛生)にすすめられて、Wellcome Trust の奨学金をいただくことができた。England の Surrey 州、ロンドンから60km 南に位置するCroydon の近く、Carshalton にあるMRC の Toxicology Unit で Dr. Michael Webb の指導のもとに1987年7月から約1年間、研究をする機会が与えられた。合格通知を受けて直ぐ、新設早々の筑波大の医学部に転勤することになったが、当時の研究グループ長、藤原喜久夫教授のお許しをいただいた。助教授の月給プラスWellcome Trust からの奨学金を加え、生活費は全く心配することなく、しかも教室の仕事から開放されて自分および家族のためだけに勉強し、英国生活を楽しむことになったわけである。当時の British Council の原俊子さんをはじめ多数の職員の方々の親切なお世話に今でも感謝している。

### 2. 研究所の秘書の適切な対応

まず、研究所の秘書 Mrs. Cris Gray の親切で適切な対応が思い出される。母親のような態度で、ユーモアと皮肉と機知の奇妙に入り交じった独特な言い回しで、世事に疎く、英会話も余り達者でない私に、忙しい中なかといる世話をして下さった。

Carshalton に着いて直ぐ、予め手配されていた100年も経つ Grayhound Hotel に投宿したが、朝早く Cris は私を pick up し、不動産屋で住居の鍵を受け取り、研究所から歩いて10分の South Rise 通りにある Semidetached House に案内する。次いで、Barkleys Bank に口座を開く。午後、私の師匠となる Dr. Webb を紹介し、研究所のいろいろな決まり等を手慣れた口調で説明する。1ヶ月後には妻と小3、5年の娘と息子が来る。そのために小学校をどこにするのがよいかなど生活全般細々としたことについても教え、措置して下さった。郵便物のトラブルなど、こちらもよく相談にいったこともあるのだが、私が彼女のオフィスに行くと、彼女冗談まじりに曰く、"Oh, Dear! Dr. Trouble Maker comes here." などと言いながら陽気に相手をして下さった。彼女なしの英国生活は考えられない。彼女のよき character によるところもあるが、外来者への対応に対する研究所の policy によるものではないかと思う。適切な導入により、外来研究者は不安なく仕事を始められるわけである。これに対して、わが国の外国人への対応は大変問題がある。よく言われることだが、留学生が私のように心の底から感謝して帰国するようになるノーハウは、われわれ

は分かっているのである。しかし、それが十分にできていない。わが筑波大にも、学生および院生あわせて7%もの外国人留学生が学んでいる。責任を感じずの次第である。

### 3. Webb 先生との研究

わずか1年余りの研究生生活であったが、実りの多いものであった。研究所に出勤した初日から直ちに研究テーマについて議論が始まった。私の下手な英語も、仕事のこととなれば shy ではいられない。もう夢中になって喋りまくった。訪英の前から先生の研究は熟知していたし、私の論文も読まれていたので、研究テーマは「カドミウム誘導タンパクの腎臓における挙動」と、直ちに決まった。生化学者である先生と電子顕微鏡レベルのオートラジオグラフィを含む病理組織学の技術をもった私との共同研究は翌日から始まった。週に数度の2~3時間をかけての討論に、先生は私を、Mat(Masataka), Mat と呼びながら惜しみなく対応して下さい。登山と自然と酒とユーモアが好きということで、趣味も完全に一致していた。

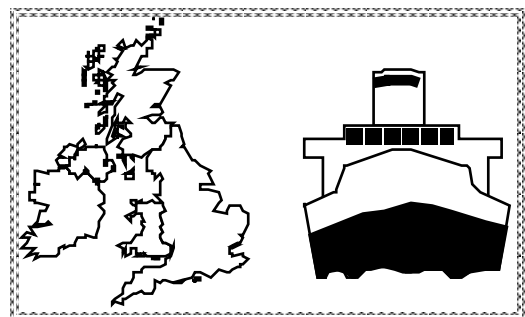
先生は、カドミウム中毒の腎障害発症機序について頑固なまでに明確な story(作業仮説)をもっておられた。そして当時、その仮説とやや異なる考え方が国際的には主流であった。話を面白くするために enemy という言葉をときどき使われた。どちらの考え方が正しいのか。その考え方の違いはどこからきたのか。違いを明らかにするためには、どのような実験を組立てたらよいのか。十分な思考、議論をふまえ、不備な実験のために信頼できない結果を得ることのないよう徹底した準備を行う。そのために、何と多くの時間と経費のかかることか。しかし、このような石橋をたたいて渡るような慎重な実験ステップが、新しい事実を発見するためには必要であることを、いやという程学んだ。そして、得られた結果については信念をもって論文としてまとめる。その論文の考察部分は、あたかも文学作品のような story 性を秘めている。

先生の論文は、得られた事実以上の事を書き過ぎているという批判を日本にいる時耳にした。しかし私は、science と art は共通性を持ち、無味乾燥な事実の羅列だけでは駄目だと思う。私は師匠の立場を支持したい。私は、この夢の作り方を学んだわけである。実験のみならず、私は公衆衛生の調査・研究においても基本的には仕事のプロセスは共通するものがあり、この原則に沿って楽しく仕事をしているわけだ。

先生は10数年前引退されて、Gatwick 空港の近くの自然に恵まれた Springfield に居を構えられ、私の訪ねるのを待って居られる。今年の Christmas Card の一節: ....., Once again a year without a visit from peripatetic Mat. What has happened. Don't tell me you can't get money for travel! Hurry up; I seem to age exponentially now with the passing years.

### 4. 研究者の資格

わが国では、教授がいろいろな事情から、自ら実験をせざるを得ないという非能率的な行為がみられる。私の学んだ



MR  
C の  
Tox  
icol  
ogy  
Unit  
で  
は、  
se  
nior  
sci  
enti

st が自らの idea を実験する段階になると、主として technician が実験をする。彼等も自身の実験をすることもあるが、主たる職務は scientist の実験の遂行である。彼等は scientist の実験仮説、実験計画および仕上がった論文を常に批判的に見ながら仕事をしている。従って、この実験仮説をたてる道筋と、そのあと展開されそうな story をいかに面白く彼等に見せるかが、technician の仕事への志気を左右することになる。scientist は自ら、責任をもって研究成果を挙げねばならないシステムが出来上がっているわけだ。さらに、scientist には厳しい資格審査の制度が待ち受けている、大学院を修了して junior scientist として採用され、その後、3年目、5年目に審査を受け合格した者だけが、senior そして eternal scientist としての資格が与えられる。この審査制度は、終身雇用制が前提であるわが国の国立研究機関または大学の研究者からみれば大変厳しいものである。確かではないが、junior から senior、senior から eternal それぞれの段階において、一ヶ月、一年間の審査のための期間があるときいた。言葉はよくないが、その間、仕事ぶりが見張られていることになる、私の身近かな scientist が、最後の段階でうまくいかず Unit を去っていったと聞く。わが国も近い将来、この種のシステムが社会的ニーズにより導入されよう。しかし英国の場合、去る人には別の仕事場が用意されているわけで、わが国では今のところ、そのような状況はない。

## 5. 英国で見聞きしたりストラ

わが国でも企業のみならず、国立研究所、大学などリストラが進められているように見えるが、英国では当時(1980年)でも当然のように行われていた。私の専門領域である大気汚染健康影響の領域で高名な Dr. Lawser の大気汚染による呼吸器影響研究のUnitは、彼の定年退職をもって閉鎖され、technicianの一部が Toxicology Unit に異動した。2年前、私の学んだ Toxicology Unit は発展的解消というのか、Leicester 大学のキャンパスの一角に移転した。その際、私の友人の電頭technicianは辞めた。eternal scientist も国の財政事情の悪化から定年を早められたと聞く。この Toxicology Unit の移転問題も財政的理由のように見えるが、実は国の研究政策の視点から出た思い切った措置ではないかと私は推測している。

英国人は保守的に見えるが、実は management の立場から物事の優先順位を常に検討し、決めたら実行する一つの例ではないかと思う。教わることの実に多い国だ。敬服する国民性である。

## 6. 地域の人との交わり

クリスマスには、私の家のあるSouth Rise の隣近所の人たちが、気の合う人同志招き合って、Drink Party を開く習慣があった。ビールと簡単なおつまみで、夕方から夜にかけて客間で思い思いに語り合い、笑いこける。研究所内でも Sports Day, Drink Party, Toxicology Barn Dance 等と、皆で集まって楽しむ催しものが数多く企画される。scientist, technician, secretary, workshop の人とグループはあるようだが、ホールや食堂で大騒ぎ。社交、おしゃべり、仕事、ビール、子どもの学校と、思い出すのも楽しい充実した1年であった。学会だ調査だと、何かにかこつけて英国を訪れる私である。近いうちにWebb 先生を訪ねねばならない。

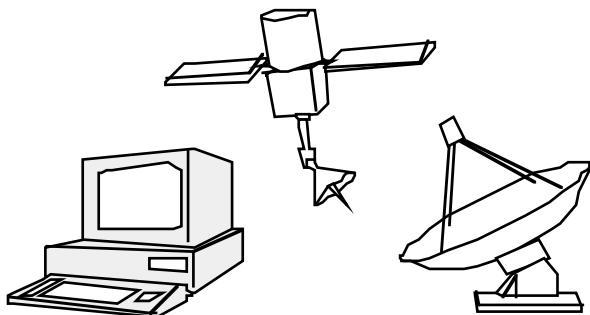
(MURAKAMI Masataka, 筑波大学社会医学系, MRC, Toxicology Unit, 1978/79)

## インターネット雑感

中村高遠

7月3日からオープンされたブリティッシュ・カウンシルのWWWホームページ(<http://www.britcoun.org/>)に早速アクセスしました。仕事柄、よく英国留学(特にサマースクールへの参加)についての相談を受けるますが、ホームページの中にその詳しい情報があることが分かりました。BCのオフィスがない地方都市にいる私としては、その都度BCJAのお世話を下さっている吉田和子さんのお手を煩わしておりますので、大助かりです。皆様がどのように利用されているか興味があります。ニュースレターにご寄稿ください。

(NAKAMURA Takato, 静岡大学工学部, Brunel University, 1987/88, [takato.nakamura@eng.shizuoka.ac.jp](mailto:takato.nakamura@eng.shizuoka.ac.jp))



## British Council 図書館の新しいサービス

ブリティッシュ・カウンシル図書館

ブリティッシュ・カウンシル図書館は設立以来、日本における唯一の英国情報センターとして資料の貸出とレファレンスを2本の柱としてサービスを提供してきました。しかし、近年の急速な情報技術の発展とともに利用者の方々のニーズも大きく変化してきています。私達も、図書館サービスを新しい時代に合った情報の提供の場として変革をとげることになりました。その概要を紹介致します。

### 1. コンピューターの利用

ブリティッシュ・カウンシル(BC)会員の皆様のために、新たに三台のコンピューターを導入致しました。現在、CD-ROM定期購入は10タイトルですが、その他のタイトルも含めてCD-ROMのコレクションを増やしていく予定です。新しい本の書誌情報のBook Bank、学者や研究者の情報 Data Base のBEST、企業情報のEMMA、週間新聞も含めて6つの新聞(The Times, The Sunday Times, The Independent 他)を見ることが出来る3種類のCD-ROMなどがよく利用されています。このほかにナショナル・ギャラリーのコレクションや百科辞典のCD-ROMもあります。7月3日には、ブリティッシュ・カウンシルのホームページをWWW上に開設しました。間もなく図書館のコンピューターを使って利用者の皆様が直接様々なホームページにアクセスすることができるようになります。英国の有用なホームページのリストも用意しております。

### 2. アーツ・インフォメーション・サービス(AIS)

英国の芸術に関する資料を集めたワン・ストップ・ショップとしてアーツ・インフォメーション・サービスのセクションを作りました。図書や雑誌、展覧会のカタログや日本では入手が困難な資料の閲覧の他、CDやビデオもお楽しみいただけます。英国訪問を予定していらっしゃる方には、劇場や美術館から直接送られて来るイベント案内がお役に立ちます。

### 3. 英国図書館資料供給センター(BLDSC)からの資料取り寄せ

BLDSCと、そのバックアップ図書館からの資料取り寄せサービスは長い間BC会員の皆様に利用されてきましたが、ファックスでオーダーできるようになりました。早い時には、1週間ですぐに手に入ります。日本では入手できない本や論文がコピーやブックローンで実費程度により手に入ることが可能です。

### 4. 貸出サービス

図書の貸出は9月30日で終了しますが、その他の資料の貸出は来年3月31日まで続けます。ビデオの貸出はその後も継続します。現在800本のビデオがあり、今後も科学・工業・技術関係のビデオも含めコレクションを充実させる予定です。

### 5. ブリティッシュ・スタディー(英国学)図書の展示

英国学の分野の図書を集めて、展示するセクションです。常に新しい本を皆様に紹介できるよう、計画が進行中です。

他にも図書館では様々な情報サービスを提供しています。一部のサービスを除いてBC会員の方は無料で利用することが出来ます。BC会員へのお誘い、図書館所蔵のCD-ROM、統計資料、BLDSCサービス等についてのリーフレットも有りますのでご請求下さい。どうぞ図書館にいらして私達の新しいサービスを御利用下さい。皆様にお会い出来るのをスタッフ一同楽しみにしております。

(年会費: 個人会員 ¥4,000 法人会員 ¥10,000)

## British Events in Japan

### \* イアン・ランキン の講演会

タイトル: "Why Crime Fiction is good for you"

東京

日 時: 9月30日(月) 6:00pm

プリティッシュ・カウンシル東京地下2階ホール

入場料: 無料(会員以外の方は500円)

京都

日 時: 10月第1週目

場 所: 同志社大学他

入場料: 無料

1960年、スコットランド生まれのイアン・ランキン氏は推理小説作家であり、ラジオドラマの作者でもある。イギリス推理作家協会の"ダガー"賞、フルブライト、ロイヤル・チャンドラープライズなどを過去に受賞している。ランキン氏の近作は、ペンネーム Jack Harvey で書いたものも含めて "The Black Book"(1993), "Mortal Causes"(1994), "Let It Bleed"(1995) 及び "Blood Hunt"(1995) がある。短編集 "Playback and Talkshow" が日本の大学生向けに注釈付で今年研究社より出版された。

上記の朗読会・講演会のお問い合わせ先(東京のみ要予約)

東京 / 電話: 03-3235-8031 (鈴木)

京都 / 電話: 075-791-7151 (森本)

### \* 日英シンポジウム「都市計画と市民参加」

日時: 1996年10月12日(土) 9:30am-5:30pm

場所: 早稲田大学 国際会議場

参加費: 3000円 同時通訳付

イギリスチームは、都市計画と地域住民協力の問題において豊富な経験を持つ3人の専門家によって構成され、環境とアメニティの改善、歴史的たたずまいや建造物の保存、経済効果の3つの構成要素を組み合わせた総合的概念としての「都市計画」を紹介する。また、イギリスの最善例を取り上

げ、市民が計画過程の各段階にどのように参加することができるかを詳しく述べていく。日本人専門家チームは、この報告を考慮しながら日本への適応性を検討する。

詳細、申込書はプリティッシュ・スタディーズ・セクション(担当: ジェンキンズ/佐藤)まで。

### \* かくはん・混合技術の国際的標準化に関する研究組合を日英共同で結成

かくはん・混合技術は古くから幅広い産業分野で利用されている基礎技術で、技術情報や知識・ノウハウは膨大な蓄積を有するが、国際的な統一用語もないのが実状である。そこで日英両国が持つ情報を共有化し、産業界での生産合理化に結びつけるために「日英攪拌・混合技術の国際的標準化に関する研究組合」を結成した。同研究組合は英国BHRグループ社と日本企業および大学の参加グループ(代表 東京工業大学小川浩平教授)で共同作業にあたり、プリティッシュ・カウンシルの資金助成と研究組合費で運営する。いずれは世界的な標準とすることを目指す。

### \* 日英地震危険度フォーラム

4月2日から4日までロンドン大学インペリアル・カレッジに於いて地震工学の日英ワークショップ(英国側代表 インペリアル・カレッジ エルナシャイ教授)が初めて開催された。プリティッシュ・カウンシルの助成を受けて日本から千葉大学高梨晃一教授を代表とする8名の専門家が出席。89名が参加したワークショップは、恒久的な協力関係が築かれる一助となった。今後も日英の地震工学研究者の間で意見情報交換を続けていく。

### \* 英国留学フェア

英国留学情報室は今年も10月初旬に英国留学フェア及びセミナーを開催する。約50校の英国教育機関の代表が来日し、英国留学希望者に対して個人面談を行なう。参加無料。詳細は、英国留学情報室(東京)、大阪、名古屋の各オフィスへ。

## 編集後記

BCJA Newsletter も創刊以来3年めとなりました。この間さまざまな分野の方々の思い出や含蓄のあるエッセイに、自分の過ごした英国生活の思い出を錯綜させながら、読者のどなたよりも早く原稿に目を通させていただくという貴重な体験をすることができました。普段とかく自分の専門分野以外の文章に接する機会が少ないのですが、「毎日寝る前のしばらくの時間を、文学や哲学など専門以外の書物に目を通すような生活を心がけるべきである。」という学生時代の教えに、この編集という作業によって少し近づけたような気がします。これまでのNewsletter を改めて読んでみると、多くの文章がこのまま埋もれてしまうのはもったいないような気もし、将来的にはBCJA発行というかたちで単行本にしてもよいのではないのでしょうか。この件につきましては今後委員会で検討させていただきたいと考えています。

今回は多数の方々から原稿をお寄せいただき、うれしい悲鳴をあげております。そこで予定の8ページが14ページとなりましたが、それでも載りきらずやむなく次号へまわさせていただいたものもあります。さっそくE-mailで原稿をお送りいただいたものもあります。また、「著書紹介」は芝谷先生にはお断りしておりませんが、たまたま手にしたこの書に感動を覚え、またBCの大先輩ということとその内容から知りましたので、私の独断で紹介させていただいたことをお断り申し上げます。

また、前号からこのNewsletterのタイトルの部分にロゴマークをいれてみましたがお気づきでしょうか。British Councilのロゴマークに日の丸を組み合わせBCJAを表現したのですが、まだ正式に採用されたものではありません。ご意見をうかがえれば幸いです。

(平 孝臣, 東京女子医科大学 脳神経外科, University of Birmingham, 1988/89, ttaira@nij.twmc.ac.jp)